

京都大学	博士（地域研究）	氏名	園中曜子
論文題目	トルコ共和国におけるヴィジュアル公共圏の成立と展開 —複合社会をつなぐ承認と共感のコミュニケーション—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、トルコにおける政治文化の変容を、ヴィジュアル・ポリティクスの観点から論じる。そして、人びとがヴィジュアル・イメージを用いて共通の関心事に関わる問いや主張を開かれたかたちで呈示し、文化政治的なコミュニケーションを行う場であるヴィジュアル公共圏が、2008年前後にトルコにおいて成立したと主張する。本論文は、このヴィジュアル公共圏の成立と展開の過程を追うことで、ヴィジュアル・イメージを用いたコミュニケーションが、トルコの民主主義および公共圏のありかたにどのような影響を与えたかについて考察する。</p> <p>第1章は、本論文の問いと視角を示す。現代トルコにおいては、ゲズイ公園でのデモが示すように、多様な人びとが政治参加を為すに至っているが、そこにおけるコミュニケーションはいかに可能になっているのか。本論文はその基盤はヴィジュアル・イメージを用いた共通感覚にあると主張する。ヴィジュアル公共圏という視角は、共通の場を有する人びとが、出自やイデオロギーの相違を超えて、言語的論理のみに依存することなくコミュニケーションを行っている、現代の多元的で民衆的な公共圏の実態を明らかにするものである。</p> <p>第2章は、トルコ共和国の国民概念の成立過程を考察している。そこでは、諸民族・諸宗教に属する人びとの統合の試みと挫折の上に、共和国の国民概念の基礎が成立していく過程を示している。</p> <p>第3章は、1970年代末までのヴィジュアル・ポリティクスの歴史を考察している。そこでは、世俗主義に基づく政権がイスラームの要素を公共空間から締め出す一方、西洋やアナトリアの文化を連想させるヴィジュアル・イメージを制作したのに対して、民衆の側では日常の喜怒哀楽を表現したヴィジュアル・イメージが人気を博し、人びとがトルコ社会における共通感覚を形成していった過程を示している。</p> <p>第4章と第5章は、1980年から2013年5月のあいだのヴィジュアル・ポリティクスの歴史を考察している。第4章は、1980年代と1990年代において、世俗主義政党とイスラーム主義政党の政党政治的な対立に基づいた、ヴィジュアル・イメージによる政治的交渉が多数行われたことを示している。第5章は、2000年代において、テロやマイノリティへの暴力事件、政権の強権化などが表出する中で、2008年前後に国の一体性喪失の恐れと平和的共生の願望のあいだのジレンマが高まり、そのジレ</p>			

ンマの中からヴィジュアル公共圏が成立した過程を示している。それは、政治的な対立の言語を超えて、誰もが安心して生活できる社会を実現すべきだという共通感覚を、ヴィジュアル・イメージを通じて公共的に構築する動きであった。

第6章は、2013年5月のゲズィ公園デモを契機として、ヴィジュアル公共圏が発展を遂げた過程を考察している。そこでのヴィジュアル・イメージの使用は当初、市民団体が反対勢力の批判を避けつつ主張を行うための媒体であったが、やがて「普通の市民」がコミュニケーションを行う手段としての役割を担うものとなっていった。

結論では、ヴィジュアル公共圏がトルコの民主政治および公共圏のありかたに与えた影響について考察している。ヴィジュアル公共圏は、ヴィジュアル・イメージの持つ情動喚起性と多義性から、自身が属する集団のイデオロギーや利害に基づかず、共通感覚に基づいて平等な立場から物事を判断し、承認と共感によってコミュニケーションを行うことが可能となる場である。そこで呈示される問いは誰でもが安心して暮らせる社会という生活に関わるものであるために、高度な政治知識がなくてもそのトピックに関心のある者すべてがコミュニケーションに参加することが可能になる。

本論文は、現在のトルコの民主政治において、人びとが意見の複数性を保ちつつコミュニケーションを行うことのできるヴィジュアル公共圏が大きな影響力を持つようになってきていることを指摘している。そして、ヴィジュアル公共圏と議会政治の場を協働させていくことが、トルコの民主主義を健全に機能させていく上で重要な課題であると結論づけている。